

## 親鸞聖人いまさずは



学 勸  
利生  
大田 利生

## 「本願の教え」

2023(令和5)年には、親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年の慶讃法要が厳修されます。

日頃、教えを聞き、聖人のお人柄にもふれながらの生活の中で、「聖人いまさずは」と思うことはなかなかできません。それでも、教えに出会い、味わいを深めていく中で、一度立ちどまって考えることは、さらに仏さまの世界に導かれていくきっかけになると言えましょう。

のではないのでしょうか。このように言えるとして、もしそう聞かれて、たじろがない人はまずいないでしょう。

ただ、人生をむなしく、寂しく終わらないようにしたいという気持ちは、誰もがどこかに抱いているような気がします。

親鸞聖人は、このむなしく終わらない人生、それはどういう生き方を自らの体験を通して、私たちに教え示してくださっているのです。それは、一言でいえば、如来に育てられていく人生だと言われます。言い換えますと、如来のご本願に出会い、うなづき、受け入れていく人生といえます。

浄土真宗とは、本願そのものです。そして、その宗名は本願(第十八願)の法義に名づけられたものです。また、智慧と慈悲の阿弥陀如来のあらゆる衆生を仏の世界に導き入れたいという慈悲のはたらきです。だから本願は常に私のところにはたらく場所があるのです。そのことを

親鸞聖人も「和讃」の中で、「本師源空いまさずは このたびむなしくすぎなまし」(註釈版聖典596頁)。また、「如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき」(同617頁)と讃詠されています。「法然聖人がおられなかったら」「如来のご本願に遇うことがなかったら」と、み教えに遇い得たことの喜びが溢れ出ているようです。

ところで、私たちがこうして生きているということについて、それは、何のために生まれてきたのですか、と問われていることだと言える『正信偈』の中に「本願海」「群生海」と、仏の世界も衆生の世界も同じ海によって示されているのであるとうかがうことができます。

第十八願には、十方のあらゆる衆生を、本願を信じ、念仏する者に育てあげて、私の仏国(浄土)に生まれさせることができないならば、私はさとりを開きません、と誓われています。本願を信じていく、受け入れていくところには浄土の世界が開かれていくということです。必ず仏になるべき身に定まり、浄土への一步一步を歩むことになるのです。

また、念仏するということも、仏の真実を頂戴して生きていくということです。お念仏を喜んでいるこの私、その私が最後のよるべである。このように先哲は言われています。『大無量寿経』には、「生の従来するところ、死の趣向するところを知らず」(同70頁)とあります。そのよくな私に生きる方向としてお念仏の大道を示していただいたのが親鸞聖人でした。